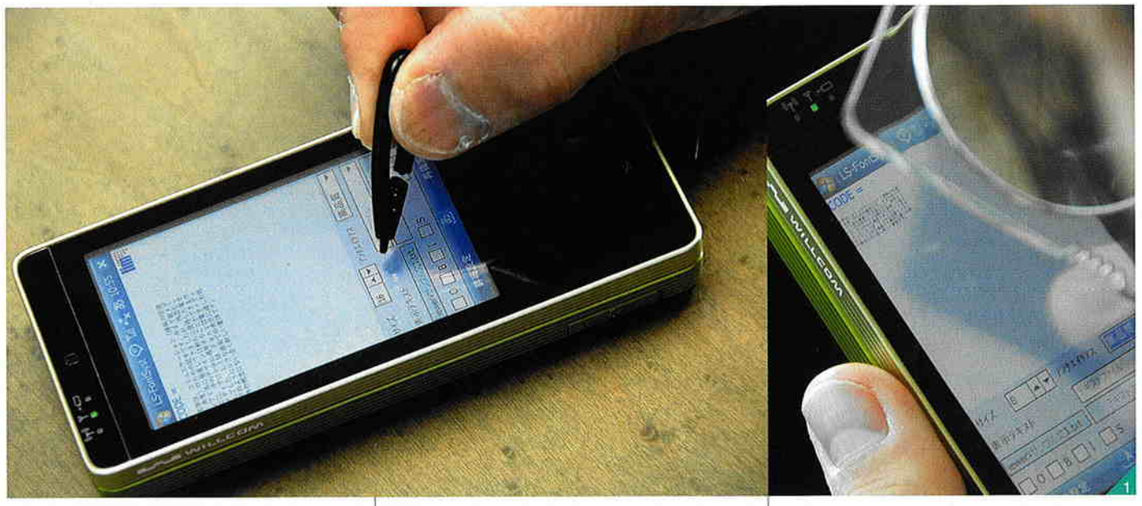
浜松創業者列伝 浪漫起業

株式会社リムコーポレーション

独自のフォント技術で世界への飛躍を目指す

携帯電話のメール機能を使う際に、誰もが目にするデジタルフォント(文字)。国内の携帯電話用フォントで圧倒的な開発力を誇る株式会社リムコーポレーションは、より進化した技術で世界のフォント市場への飛躍を図っている。

社長◎竹塚 直久氏
本社◎浜松市西区村櫛町4598−9
浜名湖国際頭脳センター内
電話◎053−484−4800
FAX◎053−484−4810
事業内容◎各デジタルフォントの開発、製品化、ライセンス販売など
http://www.lim.co.jp



米粒に写経できる小さなフォント

まずは、このページ上の写真をご覧いただきたい。写真の携帯電話はほぼ原寸大だが、そのディスプレーに極めて小さいフォントが表示されているのをおわかりいただけるだろうか。

「これは当社が開発した最新のフォントエンジン(文字表示プログラム)によるデジタルフォント。文字の大きさをペンタッチで自由に縮小・拡大でき、最小8×8ドットくらいまで表示可能です。例えて言うなら、米粒の上に写経できるくらいの小さな文字が表示可能ということです」。リムコーポレーションの竹塚直久社長は、そう言って誇らしそうな笑顔を見せる。

「ただ、実際はそんな小さい文字に対するニーズがありませんので(笑)、一般の携帯電話には採用されていません。それでも、この技術は世界で唯一、当社だけのもの。高度な開発力を雄弁に物語る具体例として、大きな説得力をもつと思っています」

現在、国内で販売される携帯電話の70%に、同社のフォントが採用されている。まさに、フォントというニッチ市場で独走状態にあるといえるが、そこに至る道のりが決して平坦だったわけではない。

同社の設立は昭和63年(1988年)。当時はバブル経済の終わり頃で、世の中はまだ好景気を保っていた。ところが、設立して1、2年も経つと景気は急速に悪化。同社にとって、しばらく厳しい状態が続いたが、やがて大手携帯電話メーカーが経費圧縮のため事業部の統廃合を進め始めた。このため、従来は社内で行っていた技術開発を一部アウトソーシングするようになり、フォント専門のベンチャー企業であるリムコーポレーションにもチャンスが巡ってきたのだ。

「しかし、当時の携帯電話で使われていたフォントはカタカナや数字くらい。表示方式はビットマップという点で形を作るやり方で、技術的にあまり高度なものではありません。そうしたフォントは印刷系の会社が主に供給しており、当社のようなソフトウエア系の会社に対するニーズは相対的に低かったのです」

だが、平成11年(1999年)にNTTが「iモード」のサービスを開始してから、状況は一変した。専用の携帯電話を使い、電子メールの送受信やウェブページの閲覧ができる「iモード」の登場で、カタカナや数字だけではなく漢字も表示できるフォント技術へのニーズが生まれた。

そうなって、俄然(がぜん)、注目を集めたのがリムコーポレーションの技術。他社にない独自のフォント作りで、急激に供給を伸ばしていった。

欧米企業を経由して中国市場にアクセス

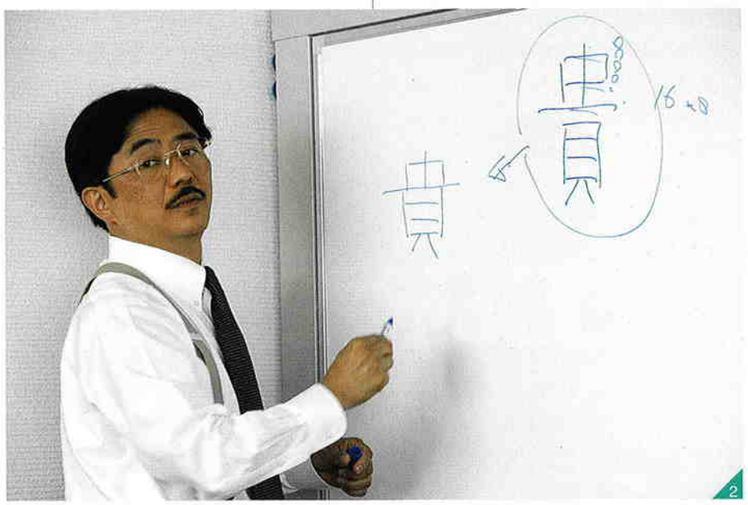
「当時、私たちがこだわっていたのは『視認性、可読性に優れた文字を創る』ということ。携帯電話のディスプレーのドット数には限界があり、画数の多い文字はしっかり表示できません。そこで当社は、漢字の画数を省略しても読めるようにする独自のソフトウエア技術を開発したのです」

このページの2の写真を見ると、ホワイトボードに「貴」の文字と、それとは微妙に違う別の文字が書かれている。後者が画数を省略した携帯電話用フォントで、正しい漢字でなくても読む人には「貴」という漢字として認識させるというものだ。その後、同社は漢字を省略せずに表示する技術も開発しているが、当初の「画数を省略して可読性を確保する」フォントが、携帯電話業界に大きなインパクトを与えたことは想像に難くない。

こうして国内のフォント市場で確固たる地位を築いた同社だが、目の前には大きなフロンティアが広がっている。それは言うまでもなく、海外のデジタルフォント市場だ。しかし、海外はアルファベットのフォントが圧倒的に多く、リムコーポレーションを売上で上回る欧米企業がしっかりとシェアを握っている。その中でターゲットとなるのは、果たしてどこの市場なのか。

「ズバリ言って、それは日本と漢字文化を共有する巨大な中国市場です。ただ、今の中国はまだ知的所有権に対する認識の低い国ですから、そのまま出て行ったらたちまちコピーされてしまうでしょう。そこで、まず、知的所有権に厳しい欧米の携帯電話メーカーに当社の技術を売り込む。そして、欧米メーカーの製品に当社のフォントが搭載される形で、中国市場にアクセスすることを基本戦略と位置付けています。このやり方なら、漢字の表示技術をもたない欧米勢にもメリットがありますし、当社の技術が中国に流出する心配も少ないと思います」

一方、国内の携帯電話市場は飽和状態にあるものの、高度なフォント技術は他の工業製品でも求められている。世の中には、フォントに対する未知のニーズがまだまだ眠っており、それをいかに掘り起こすかが今後のカギを握るといえそうだ。



1 非常に小さな文字まで表示できるリムコーポレーションの技術
2 漢字の画数を減らしても読める技術を開発した
3 海外展開のビジョンを語る竹塚直久社長
4 5 すっきりしたレイアウトのオフィスで、高度なフォント技術が生み出される